

令和3・4年度「学びの深化プロジェクト実施校」実績報告書（1年次）

1 学校名等

学 校 名	宮津市立 吉津小学校							校長名	東山 憲行	
研究教科・領域等	生活科・理科・総合的な学習の時間									
研究主題	児童が夢中になって学ぶ Creative な授業づくり ～学びに向かう力をはぐくむICT利活用～									
研究の目的	学習者主体の学習及びICTの効果的な活用の研究を通して、児童生徒の主体性（「学びに向かう力」）を育成する。									
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合 計	教職員数	
学 級 数	1	1	1	1	1	1	1	7	12	
児童生徒数	6	11	5	9	8	9	4	52		

2 研究校の概要

本校は、全校児童 52 名の小規模校である。小規模校の強みを生かした「つながり」を意識した異年齢での取組の中、児童は明るくのびのびと生活している。また、体験的な学習では、地域の方も積極的に協力していただきコミュニティ・スクールとして地域との「つながり」もできつつある。

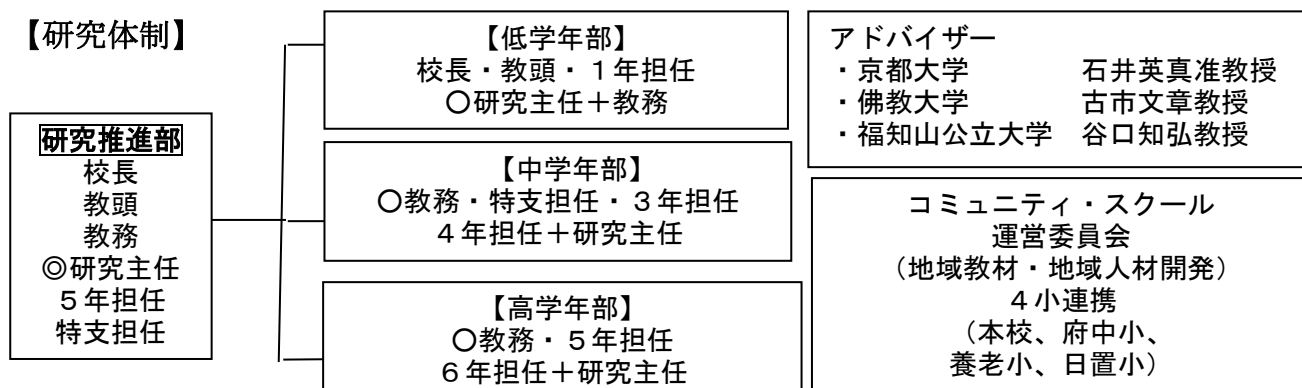
【研究主題について】

「学びに向かう力」の涵養は、喫緊の課題であるがその要素は多岐に渡っており、育成方法や評価については研究の必要があると考えた。児童の実態に即した「学びに向かう力」の具体像を示し、教員間での共有、評価指標の設定も行き、児童の「学びに向かう力」の涵養を目指した。

【本校の「学びに向かう力」の具体像】

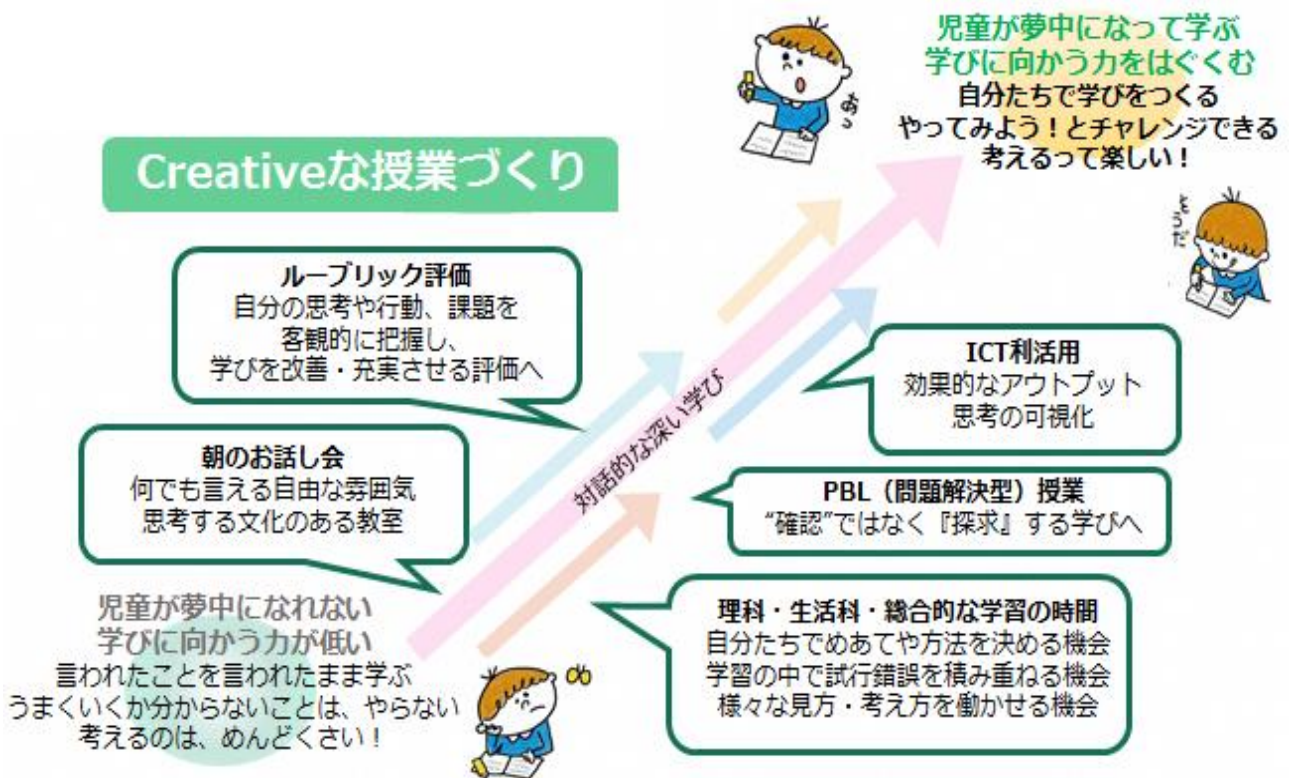
- ・学習の中で問いをもち、見通しをもって自分なりに目標を定めたり、予想したりする力
- ・試行錯誤を繰り返し、何度もあきらめずにチャレンジできる力
- ・人やものに関わりながら、自ら問題解決しようとする力
- ・好奇心や協調性をもち、自己主張や自己抑制をしながら、自分で自分をこういう方向にもっていききたいという気持ちがおき、ひるむ心やなまけたい心を自分で励ましながら、自分なりにがんばれる力

【研究体制】



*教務はICT推進リーダー、研究主任は2年担任を兼ねる。

Creativeな授業づくり



3 主な研究活動

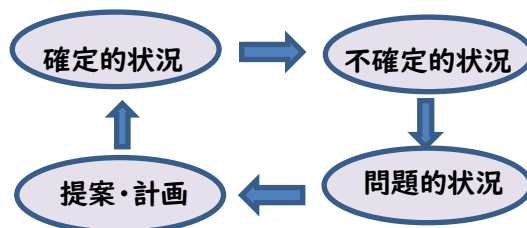
(1) 学級が学びの集団となる学級経営



心おきなく自分のことが表現できる『朝のお話し会』

- ・自分なりにテーマや話題を選び、自由に話す
- 自ら学ぶ意思をもつ基盤づくり
- ・様々な見方・考え方を働かせて、「おたずね」をする
- 簡単なことではないことにも向き合う基盤づくり
- ・小さな問題解決を積み上げる
- 他者と協働的に実践する基盤づくり
- ・話す楽しさ、聞いてもらう喜び、聞くおもしろさを感じる
- 一人ひとりが学級の中で大切にされる、安心して過ごせる
- 学び手として育つ第一歩に

(2) PBL (課題解決型) 授業の授業づくり



- ・「確認」ではない「探求的な学び」
- ・問題が子どもたちにとって、解決したい切実なものとする
『珍しさ・複雑さ・不明確さ・葛藤』を感じさせる問いからのスタート

- 課題解決のためのサイクルを身に付ける。解決するために、他者と協働するようになる。
- 多面的に考え、物事の本質をとらえることができる。自ら考え、自ら行動できる。
- 学びに対して、肯定的な態度を育て、学びの主役は自分たちだという感覚を育てる。

(3) ルーブリック評価の作成

- 具体的な児童の姿を明確化し、数値化しにくい思考の深まりや主体性の客観的な評価の開発

探求的活動における 長期的ルーブリック

宮津市立吉津小学校

学びに向かう力 長期的ルーブリック

段階	評価の位置	評価の位置	理解・特徴	注目の・高規
VI	本質的な課題を見極めることができる	下調べをして、インプットするべきポイントを定めていくことができる	情報を組み合わせて新たな意味や気づきを見出すことができる	身振りや声の抑揚など伝え方を工夫できる
V	学びに見通しをもつことができる	目的にあった質問の形式や内容を考えることができる	情報を選んだ根拠を説明することができる	相手の反応を見て伝え方や内容を工夫することができる
IV	課題解決に向けて自分なりの仮説を立てることができる	大事だと思ったところを筋書き、まとめてポイントをとめて書くことができる	要点を考えて、情報を分類・整理できる	伝えたいことに応じて、表現を工夫できる
III	振り返りをするときに、次にやってみたいことを考えられる	AND、ORなど条件を工夫して検索することができる	一つの資料から複数の観点をもつて情報を読み取ることができる	相手を意識して伝え方を工夫できる
II	学びを振り返ることができる	調査・新聞データベースを活用して必要な事や記事を見つめられる	複数情報から共通・相違点を見つめられる	情報からわかったことをまとめられる
I	自分で課題を見つけることができる	目次や索引を活用して情報を見つけられる	課題解決に役立つ情報を調べることができる	(ものを見せながら)大きな声でわかりやすく話せることができる
0	流れの「例年通り」をなくす。単元計画はあくまで計画。子どもたちの「したい」「やりたい」に真摯に向き合う。子どもたちが「喜ばせられる」「考えればやってみよう」と知っている。			

評価	学びに向かう力	長期的ルーブリック	評価
VI	自分のよりよい学びのために見通して努力することができる	思い通りにならないことも、楽しめる	意図や学びの課題を自ら見つけ、問題解決して学習できる
V	自分の学びをふりかえることができる	うまくいかなくても、やってみようというチャレンジ精神	いろいろな考えや立場の人の意見を見聞きして意思決定することができる
IV	どうやって調べようか、どんな発表をしようかと、自分で決めている	うまくいかなかった時に、その理由を考え、次ににつなげることができる	自分の考えや立場の人の意見を見聞きして、自分の考えを主張したりして受け止められる
III	新しいことを学ぶときに、今までに学んだことを使って考えられる	分からないことや疑問などをたずねたり調べたりできる	違う考えをも尊重せずに最後まで聞くことができる
II	自分からすすんで調べたり、書いたり、発表したりしている	「なぜだろう?」「おかしいな?」「どうだろうか?」と考えられる	人それぞれ感じ方や考え方が違うことを知っている
I	自分にとってふさわしい目標やめあてをきめて学習している	失敗をおそれず、自分の意見や考えをもつて発表することができる	どうすればこの問題が解決するか、自分の考えや意見をすすんで出すことができる

(4) 効果的な見通しのもたせ方・振り返りの方法についての研究

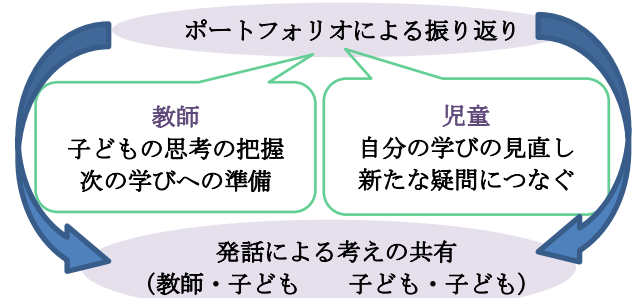
(学習前)

Mission
授業のなかで書いたり、書いたりして自分の思いを伝えたいです。そのためには自分の考えを整理して、発表できるようにしたいと思います。

学びの振り返り

（ものが読めるしくみを学習して）

No.1 月 日 ()
No.2 2月 日 ()
No.3 3月 日 ()
No.4 4月 日 ()



- 子どもたちの考えを可視化するワンページポートフォリオを活用。自分の学びを見直し、新たな疑問につないで書くことで、次時に自分たちでめあてを決めて、流れをつくり問題解決をする姿もイメージしやすくなる。子どもたち自身が、学習前後の自分の変容に気付くこともでき、学びの価値につなげる。

(5) ICTの利活用による思考の可視化、アウトプットの効果的な手法

- 「普段使い」の中で、自ら選択して活用できる力の育成

【リモートの活用】 【意見交流・提示】 【記録・測定】 【話し合い活動】

4 今年度の研究の成果と検証

(1) 児童の「学びに向かう力」の意識の高揚

アンケート 質問項目	5月	11月
自分にとってふさわしい目標やめあてをきめて学習している。	3.0	3.2 ↑
どうやって調べようか、どんな発表をしようかと、自分で決めている。	3.0	3.2 ↑
うまくいかからない時も、「やってみよう」とチャレンジしている。	3.4	3.5 ↑
自分からすすんで調べたり、書いたり、発表したりしている。	3.1	3.2 ↑
友達と協力してめあてに取り組んでいる。	3.3	3.5 ↑
自分の学習の仕方を反省し、やり方を工夫して学習している。	3.1	3.3 ↑

◎「学びに向かう力」の高まりをみとっていただくために、全校児童対象に Forms を活用したアンケート調査を実施した。
*各項目 4 点満点

抽象的な力である「学びに向かう力」を具現化し、校内全体で方向性を揃えることで、学習者視点を大切にした主体的な学びづくりの価値を児童も教員も実感できた。探究活動を軸にした子ども主体の学習への転換という挑戦を続けた。児童の学習者としての学びのあり方、教員の支援者としての指導のあり方の意識を変えることができた。

(2) ICT利活用

子どもたちが将来生きていく社会（Society5.0、VUCA等）は、予測困難な中、自ら判断し行動する力が必要であり、「人とかかわり合いながら、新たな価値を見出すことができる力を付けた児童」を目指すことを教職員で共有することができた。目指す児童像を実現するためには、ICTを使うことが目的の利活用ではなく、普段使いする中で、効果的な方法について児童が自ら考え、活用することができる真のICT利活用となるよう、試行錯誤することができた。

「教師による一斉学習の中でのモニタへの提示」「個別最適な学びに関わる活用」「協働的な学びに関わる活用」について、効果が見られた。効果的な活用について、教職員のミニ研修（放課後15分）を継続し、実践交流をする中で、児童の実態や学級の状況に合わせたICT利活用ができた。

5 今年度の課題

(1) 課題解決型の学習につながる学習者視点の授業改善について

「学びに向かう力」を高めるには、学習の主役は自分たちだという意識を児童にもたせることが必要である。決まった教科だけを学習者視点とするのではなく、どの教科においてもその意識を大切にすることが課題である。そのために、研究教科の枠をとり、どの教科においても、指導者自身がよりファシリテーション能力を高める必要がある。

(2) 学びに向かう力と認知能力とのつながり

「学びに向かう力」を具現化し、評価指標をルーブリックとして設定した。アンケート調査により、学びに向かう力の評価を試みているが、各教科の数値化される点数とのつながりを明確にできていない。学びを自分事とすることで、学力保障につながる結果として見えてきていないことが課題である。科学的な視点に立って教育や学習を捉え、より学びに向かう力を高めるための評価について、研究を続けていく必要がある。

(3) 普段使いの1人1台端末へ

4月よりオンラインでの家庭学習も可能となる。1人1台端末を、より普段使いできるように、子どもたちの学びを支える文具としての利活用を推進する。

6 2年次の研究構想

研究最終年度となるが、各教科・領域において、研究指定終了後も継続して、学習者主体の学びを活かし、学びに向かう力を高めることができるよう、研究をさらに進める。

(1) 各教科・領域における指導の工夫改善

研究教科の枠組みを外し、学級での学習全体を通して学習者主体の学びができるように推進する。この研究は特別なことではないこと、どの学校でもどの先生にもどの教科でもできることを伝え、実践を広げていく。

(2) 1人1台端末の活用

(3) 本研究取組の最終成果の検証